

認知症の本質を知り、共に生きるために 第2回「高齢社会2030を考える会」報告

加藤しのぶ 取材・執筆

2030年に迎える超高齢社会の具体的な姿をイメージし、今取り組むべきことを参加者と考えようと思ったのが大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所主催「高齢社会2030を考える会」だ。その第2回が2019年5月28日に開催された。テーマは「認知症」。参加者にとってこれまでの認知症への意識を変える、有意義なものとなった。

認知症の「本質」を知る —— 共感的理解の重要性

考える会第2回のテーマは「認知症 それがどうした!と笑い飛ばせる地域社会の未来」である。

第1部は田中雅人大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)所長の挨拶の後、小川敬之京都橋大学健康科学部教授が登壇した。小川氏は作業療法士などを経て現職に就く傍ら、NPO法人の理事長として認知症と共生する社会づくりの実践活動にも取り組んでいる。

講演では冒頭に「認知症の本質的なところを感じ取ってもらえれば」と前置きしたうえで、さまざま

データ等を提示しながら、認知症の捉え方そのものが世界的に変わってきていることをあげた。

認知症の中心的な症状は、かつては記憶障害と捉えられていたが、現在では社会的認知の障害、つまり自分自身や環境・物、そして人との関係が崩れていく「関係性の障害」と考えられているそうである。

たとえば、認知症の人は服を着る動作がうまく行えないというような、生活のいたる場面で周りからは見えない「つまずき」「混乱」をたくさん経験しており、それが重なることで不安や恐怖感、絶望感を抱いてしまい、しかもそれが目に見えないことが周囲の理解を阻んでいる。だからこそ、その生活支援には「その人



第2回「高齢社会2030を考える会」

実施日 2019年5月28日 17:30～19:30

会場 グランフロント大阪
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
都市魅力研究室

主催 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所

2030年の超高齢社会を見据え、地域でしなければならないことを参加者とともに検討する。第2回は、京都橋大学健康科学部教授の小川敬之氏をゲストに迎え、認知症患者との共生社会づくりの方向性を解説していただき、議論を交わした。

がどのような風景を見ていて、どのような混乱状況に陥っているのかを考えることが大切だ」という。これまで「認知症=世話を必要とする人」という偏った視点だけで捉えていたことを痛感しながら、小川氏の言葉で締めくくられた。

共に生きる —— 心を寄り添わせて

第2部では、先に池永寛明CEL顧問が登壇。社会全体の問題点として、急速に失われていく大阪言葉と背景にある文化の衰退、家族形態の変化による問題などをあげ、それに対応するためにも場と地域の力、家族の力をどうあげていくか、そのために大切になるのは文化であると語った。

続いて小川氏と池永氏の対談が行われた。家族形態の変化による関係性の構築の難しさについて池永氏が問うと、小川氏は「一緒の家にいることがいいことかどうかはわからない」とし、アニメ『もののけ姫』からの言葉「共に生きる」を借りながら、共にそれぞれが生きやすい環境を考え、共にその時代を生き、決してつながりが切れないようにする、「つながり方」の模索が必要と話したのが印象に残った。

その後参加者から寄せられた質問をもとに質疑応答となったが、専門的な内容から自身の介護経験に基づいたものまで、幅広い質問が多数寄せられた。参加者にとって、認知症の問題がいかに身近かつ喫緊の課題であるかがうかがわれた。たとえば、

「要介護3で施設に入っている親に対して家族ができることは」「施設にいる父は帰宅願望が強く、それができないために会いに行くのが辛い。これから父はどうなっていくのか」など、物理的に距離のある家族との向き合い方に関する質問に、小川氏は自身の経験談も交えながら、「大切なのは当事者のプライド、誇りを守るような関わり方をすること」と回答した。さらに「物理的な距離があっても心が一緒にいることが大事、『どうしているかな』『今日、行けなくてごめん』などと、一日一回『思うこと』を重ねていくだけで十分。そうすることである時ふっと行動が起きてくる」という言葉には勇気づけられた人も多かったのではないかと。共に生きるには心を寄り添わせること——そこから始めることから自分たちでもできる、と力づけられる時間となった。

終了後のアンケートも満足度の高い回答が多かった。*1。考える会は今後も引き続き、開催予定である。

注 *1.2 事例やアンケート回答の具体的な内容については、CELホームページ内遠座俊明研究員のレポート参照。http://www.wag-ceil.jp/information/1280104_15932.html



上/補助席を含めて満員になるほど、多くの参加者が詰めかけた。
左下/認知症の人の社会参加について熱く語る小川氏。
右下/認知症をめぐる家族のあり方について、議論を交わす小川氏(左奥)と池永氏(右)。

気になる」とし、先にあげた服の着方で混乱が始まった場合には、「仕切りなおす」ことで、できるはずの自分(プライド)をサポートするという事例や、認知症であっても有償ボランティアの形で働く宮崎や京都の施設での事例をあげた*1。

最後は認知症を特別な病気として捉えるのではなく、その症状も包み込むコミュニケーションの創生や、「だいたい仕事、たまにケア」といったハイブリッドワーキングシステムが構築できるような、「認知症、それがどうした」と言える日本になればと